

親鸞聖人のご生涯

その 11 入滅



親鸞聖人の御真影(御影堂)

安楽寺だより

第 20 号

紙面内容

- 2面 坊守、本堂で法話
3面 本山報恩講団参のご案内
4面 仏教豆知識(日本仏教③)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話 〇五二(八四一)二六〇六

弘長二年(一二六二年)十一月二十八日

「ついに念仏の息たえましましおわりぬ」

親鸞聖人は、最晩年まで著作活動を続けておられました。聖人と都での生活を共にされたのは、末娘の覚信尼でした。覚信尼と越後におられた妻の恵信尼との間では、手紙のやりとりがあつたことが、「恵信尼文書」として、現在に残されています。

聖人は、三条富小路にあつた弟の尋有の住居・善法院で、九十歳を迎えた弘長二年(一二六二年)十一月下旬、ついに病臥の身となられました。そして、十一月二十八日覚信尼と越後から駆けつけた息子の益方入道や門弟たちに見守られながら、その生涯を静かに終えられました。その時の様子が『御伝鈔』(第三代覚如上人)には、次のように述べられています。

口に世事をまじえず、ただ仏恩のふかきことをの(述)ぶ。声に余言(それ以外のこと)をあらわさず、もっぱら称名(念仏)たゆることなし。しこうして同第八日午の時(お昼頃)、頭北面西右脇に臥し(横になり)給いて、ついに念仏の息たえましましおわりぬ。

この『御伝鈔』のお言葉は、苦しみや悩みの多い人生を歩まれた聖人が、念仏の教えに出会い、人間としてほんとうに生きる道を生きぬかれたことをあらわしています。

聖人入滅の後、ご遺体は東山の延仁寺で荼毘にふされ、大谷の地に埋葬されました。その十年後の文永九年(一二七二年)覚信尼公と関東の門弟らにより、吉水の北に廟堂が建てられました。ここを「大谷廟堂」と称して遺骨と御真影が安置されました。

その後、覚信尼の孫、覚如上人が留守職に就かれた永仁二年(一二九四年)聖人三十三回忌に際し、聖人の恩徳を讃嘆した表白を読み上げられました。これが「報恩講」の始めとされています。

南無も帰命も帰るといふこと

自坊では毎月十三日に定例法話をさせていたしております。四年前より十月の定例法話を私（坊守）が担当させていただくことになりました。今年は台風でとても心配していましたが、沢山の方にいらしていただきありがとうございます。

南無阿弥陀仏・帰命無量寿如来は同じことを教えてくださっています。南無も帰命も帰るといふ意です。仏様にすべてをお任せしていのちのふるさとに帰るといふことです。

あるご門徒様のお母様が、年を召され「実家に帰らせてもらいます」と、毎日荷をまとめ家を出ようとされていたそうです。また別の方のお父様はご養子さんで、毎晩、生まれ故郷の筑波へ帰ると止める手を振り切って出ていかれたそうです。もう今はお二人とも仏様になられています。もう今はお二人とも仏様になられています。もう今はお二人とも仏様になられています。もう今はお二人とも仏様になられています。

「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋（わらじ）を作る人」という諺（ことわざ）



があります。乗る人が居なければ担ぐ人の生業（なりわい）がたらず、草鞋を作る人が居なければ担ぐことができません。皆が一役を担い一つの世界が成り立っていること

を表わしています。しかしどうでしょう、私たちは「何で私が担がなくちゃいけないのよ!」「おれが草鞋を作って、何でおまえが乗るんだよ!」文句を言っっては、不満・妬み・憎しみの苦しい世界に生きています。

互いに助け合い成り立つ一つの世界を成就する、それが仏の願う世界です。迷いの苦しみから開放され安心して日々を暮

らす、これが浄土です。苦しみの穢土（えど）に住むか、安堵の浄土に住むか、それはその人の見方で決まってくるのです。今の生き方をこれでもいいのか？振り返って自分自身を見つめ直した時、そこにお浄土の世界が広がっていくのではないのでしょうか。つたない法話を聞いていただいた方から、私自身も教えていただいた感謝の一日でした。



八事霊園、永代供養墓お盆法要の様子

11月24日(休日)本山報恩講に参拝致しましょう



渉成園の庭園

報恩講参拝の後、名勝・渉成園（枳

是非ご参詣にお出かけください。法要時間は約一時間です。

が正信偈を通して伝わってきます。

「何十年と毎日毎日周りに振り回され、忙しい忙しいと暮らしているが、それでいいのか？」と聖人の呼びかけ

今年も団体参拝を致します。親鸞聖人の御真影の前に対面して着座すると、今の自分の生き方が問われています。

京都・東本願寺で営まれる報恩講に

殻邸)を見学致します。渉成園は、東本願寺の別邸です。東本願寺十三代宣如上人が、三代将軍・徳川家光から寄進された土地で、自らの隠居所とされました。本山から東へ徒歩五分ほどのところにあり、四季の花や庭園、建物など一度は訪れたい名勝地です。ご参加ご希望の方は安楽寺までご連絡ください。

瑞穂区 感謝会法要が開催されました

九月十五日(敬老の日)瑞穂区仏教会主催の感謝会法要が開催されました。当日は好天に恵まれ、会場の紫雲殿新瑞齋場には、大切にしてこられた人形やぬいぐるみ、また掛け軸・お位牌・お札などを持参された皆様が集まりました。

会長挨拶の後、現代美術作家の山田疆一氏の、「日本人に生まれたすごさ」と題した講演がありました。世界各地を旅されたなかで、地元の人々とのこころのふれあいによって命びろいされたエピソード



感謝法要を厳修

ソードなどを、スライドの写真を紹介されながら一時間ほど熱弁されました。七十名の参加者の皆様は、お話しに笑顔で聞き入っておられました。その後、皆様が持つて来られた品物を安置した式壇に向かつて、瑞穂区仏教会住職一同で感謝法要を厳修致しました。

日頃不安や不満をすぐ口にする私たちが、感謝法要は、「おかげさま」の人生が開かれてくるきっかけにしたいと願っております。

仏教豆知識

第二十回



日本の仏教

歴史 その③

奈良時代に隆盛を極めた各宗の寺院は、政治に対して影響力を増し、当時の国家支配者に圧力をかけるようになっていました。

そこで桓武天皇は、寺院の力を弱めるために平安京（京都）に遷都しました。そして空海や最澄を遣唐使とともに、唐の国で学ばせて、新しい仏教によって奈良の旧仏教に対抗させようとなりました。最澄は比叡山に天台宗を、また空海は高野山に真言宗を開き、密教を広めました。

平安時代中期（西暦一〇〇〇年代）は、お釈迦さま入滅の二千年後にあたり、仏教が滅びる末法の世が始まったと考えられました。

「国が衰え、人々のところも荒廃し、現世での幸せも期待できない」という状況から、ひたすら来世の幸せを願う浄土信仰が流行しました。極楽浄土に迎えられたいことを願う「来迎図」を盛んに描かせ、そして都の南・宇治

の地に平等院を建て、鳳凰堂の姿形は正に極楽の阿弥陀仏の空殿を模した建造物であります。

平安時代末期になると社会不安が増大し、広大な所領の持ち主で、裕福であった大寺院は、外部からの防衛のために僧侶や信徒による武装した僧兵があらわれました。そして、対立する宗派・寺院への攻撃や朝廷への強訴などの武力行使を行う集団を形成するようになり、社会の不安要素のひとつになりました。



宇治の平等院鳳凰堂

『親鸞聖人の御生涯』の連載は、今

回をもって終わります。聖人の九十年

の人生には、出会いが大きな意味があ

りました。特に法然上人から「煩惱を

断ち切ることができない自分への目

覚めこそ仏教に近づく確かな道です」

とのお言葉を頂き、阿弥陀仏の本願を

信じ念仏する教えに、人生をかける決

意を新たにされました。民衆の中に身

をおいて、「どのような修行もおよび

がたい我が身」と、生涯を尽くして信

心の深いところを伝えて下さった聖

人のお聖教を、今一度聞いていくのが

私たちの「報恩感謝」の勤めです。